草創期

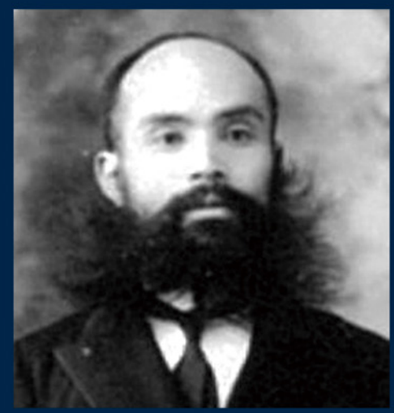
明治30年～
昭和２年
（1897～1927）

明治維新後の近代化、西洋化の波は医学の分野にも押し寄せ、政府の医療施策は目まぐるしく変転しました。この結果、岩手県は長期にわたり医学教育機関が皆無の状態が続き、医療設備も医師も少ない中、県民の医療は困窮を極めていました。

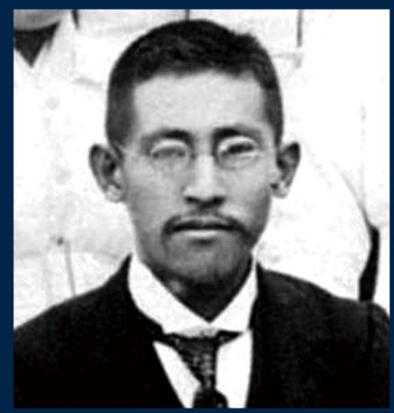
これを憂いた三田俊次郎は、私財を投じて私立岩手病院を設立、同時に医学講習所、産婆看護婦養成所を併設し、医師、産婆、看護婦の養成にあたりました。その後、医学講習所は私立岩手医学校となり、岩手病院を実習所として着実に医師を輩出していましたが、医師法の発布に伴い、医術開業試験制度が廃止され、閉校の止む無きに至りました。

俊次郎は私立岩手医学校閉校の後も私立岩手病院、岩手産婆看護婦学校を継続し、岩手県の医療の安定充実に努めました。私立岩手病院には施療部が置かれ、相次ぐ飢饉や戦争等で治療費が払えない患者にも無償で治療が行われました。この間、我が国初の政党内閣である原敬内閣が成立すると、医学教育は大学で行う方針が示され、大学令に基づき多くの医学専門学校が大学に昇格しました。

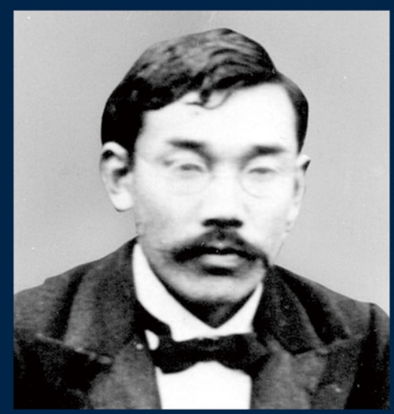
私立岩手病院設立当初の顔ぶれ



院主　三田俊次郎
（明治36年：40歳当時）



院長　杉立義郎
（明治36年：36歳当時）



副院長　三浦直道
（明治36年：38歳当時）

岩手図書館（大正12・13年頃）

社会教育普及のために図書を重視していた俊次郎は、明治39年10月に、構内病院本舎の南方に図書閲覧室を新築した。しかし、この時点では図書の整理が充分でなく、一般開放には至らなかった。

その後、明治41年9月28日、東宮殿下来盛を記念し、岩手病院内の一棟（盛岡市内丸87番地、118坪余）に私立岩手図書館を開設し、特に医学に関する内外古今の図書を収集保存し閲覧参考に供した。

市立図書館・県立図書館のない時代にあって、盛岡唯一の図書館であった。

盛岡医学講習所跡（中央建物）

黎明期

昭和３年～
昭和17年
（1928～1942）

大正末期になると、健民強兵の観点から多数の医師養成が求められ、全国的に医学専門学校設立の気運が高まっていきました。医学教育への情熱を絶やすことなく岩手県の医療の安定に心血を注いでいた俊次郎は、この機を逃さず、「無医村の解消」と「盛岡の学都化」を掲げ、医学専門学校設立の必要を訴えました。

昭和３年、俊次郎の不撓不屈の努力が実を結び、積年の宿願であった私立岩手医学専門学校の設立が認可されると、俊次郎は「医術は済生の根本、良医を養成して新附の蒼生を慈恵せよ」と高らかに宣言したのでした。

無試験開業の指定下る

人力車に乗り出発する三田校長

昭和7年3月25日（第一回卒業式前日）、文部省から医師法第1条により、本校に無試験開業の資格が指定された。指定が下りた当夜は、既に70歳の三田校長をはじめ、在校生が手を取り合って喜び、提灯行列をして盛岡市内を練り歩いた。師弟の情愛に涙する市民もいたという。

無窮の宴

署名する三田俊次郎

第一期生の送別会「無窮の宴」は、高松池畔で開催され、在校生が教授、卒業生を招待して日没の数刻前に開かれた。

かがり火の中で、恩師と先輩、後輩は酒を酌み交わし、大鍋の木蓋に恩師の署名を中心に卒業生全員が署名して母校に残した。

無窮の宴は、卒業時期の伝統行事として代々受け継がれた。

生理学実習風景
（昭和5年頃第2校舎）

ドイツ語授業風景
（昭和6年第1校舎）

医化学実習風景
（昭和10年頃第2校舎）

第1校舎竣工時の外観（昭和3年4月1日）

手前の木造瓦屋根の建物は当時の北病棟にあたる。第1校舎は撤去され、現在3・4号館が建設されている。

【建物概要】 ● 鉄筋コンクリート造4階建 ● 延べ312.2坪（1,031㎡）

揺藍期

昭和17年～
昭和30年
（1942～1955）

生涯を済世救民、人材育成に捧げた俊次郎の後を継いだのは、我が国法医学、血清学の泰斗、三田定則でした。定則は、戦後の学制改革に際し、陣頭指揮を執って大学昇格を果たし、初代学長に就任しました。温厚にして飾らず、誰に対しても敬と愛をもって接した定則は「医師たらんとする者は先ず人間であらねばならぬ」を持論とし、人類の理想に「誠」を掲げました。

俊次郎と定則の精神は、私立学校法改正に伴う学校法人への組織変更に際し、新制岩手医科大学の学則に高らかに謳われ、今日まで脈々と受け継がれています。

大学昇格を成し遂げた三田定則の教育像

昭和22年、昭和天皇が御来県、小岩井農場岩崎別荘に宿泊された時のエピソード（岩手医科大学40年史より）

「岩手には、三田がいる筈。会いたいから、呼ぶように」陛下は侍従におっしゃった。

陛下の言われた三田とは三田定則学長のことである。定則は御付きからの連絡で、小岩井に伺候した。陛下の御物語もあった。科学者としての陛下に三田定則も色々お話申し上げた。

一流の科学者としての会話・対話がそこにあったとされている。

定則はこの時、日本の大学教育について陛下に申し上げた。「今までは、大学は、学問の蘊奥をきわめるということを第一義に目標にかかげ、人格の陶冶は第二にされていた。それを人格を第一義に、学問を第二ということに改めなければならない。ことに敗戦後は人心もすたれているから、ぜひ、そうしなければならない。」陛下はうなずいておられ、同席した侍従は「よくごなっとく遊ばれたご様子」と残している。俊次郎の精神を継いだ、定則の教育像が読み取れる逸話である。

（左）三田定則
（右）晩年の三田俊次郎

女子学生の入学

女子学生の入学は医専17期からであった。

昭和24年頃の女子学生
（医専18期生）

大学予科

三田定則予科長と予科3期生
（昭和23年1月1号館玄関前）

前列中央左から
百岡胤正、三田定則、和田安民

男子学生の風俗

当時はバンカラスタイルが流行した。

昭和23年頃の予科学生

医学進学課程設置

医学進学課程は、日本大学文理学部に委託し三島校舎で教育が行われた。委託教育は、昭和30年4月から昭和41年3月まで続き、698名の本学学生が学修した。

盛岡市での教養課程発足は、昭和40年4月からであった。

拡充期

昭和31年～
昭和62年
（1956～1987）

昭和30年代の初めは、大学施設の老朽化と狭隘が大きな課題となっていました。第4代学長、次いで第5代理事長に就任した篠田糺は、岩手医科大学拡充計画を推進し、西病棟、中病棟の建設に続いて大学院医学研究科を設置、昭和40年には教養部を設置し、日本大学三島学園に委託していた進学課程を移設しました。同時に新たに校地を取得し、北日本で初となる歯学部を開設、地域の歯科医療に一大革新をもたらしました。大学の発展を象徴する槌音が連日響きわたり、本学は北日本における私学の雄として名実ともに大きく変貌を遂げたのです。

第5代学長に就任した三田俊定は、篠田理事長とともに岩手医科大学拡充計画を推進し、昭和55年には岩手県と共同で高次救急センターを開設、救命救急医療に福音をもたらしました。更に第6代の理事長に就任すると、大学院歯学研究科の設置に奔走し、本学の地歩を確固たるものとしました。

拡充計画の変遷

第一次拡充計画工事開始の頃（昭和30年5月）

第二次拡充計画工事開始の頃（（昭和39年3月）

拡充計画工事完成後の本部地区全景

発展期

昭和63年～
（1988～）

第7代学長、次いで第7代理事長に就任した大堀勉は、国立療養所の統廃合で廃止が決まった花巻温泉病院の移譲を受け、附属病院として整備、更に、北日本唯一の循環器疾患の専門医療を行う循環器医療センターを開院し、地域医療の安定充実に尽力しました。平成に入り、施設設備の老朽化が進む中、創立以来の内丸キャンパスは最新最先端の医療機器を整備するには狭隘で、また県都盛岡市の中心にあって慢性的な交通渋滞を惹起していたことから、新天地への大学及び附属病院の移転を決断、総合移転整備計画を策定しました。平成19年、その第一次事業として広大な矢巾キャンパスを開設、薬学部が新設され、本学は医療系総合大学として生まれ変わったのです。そして平成23年3月には、総合移転整備計画第二次事業として医学部・歯学部の基礎講座が統合移転し、本学は我が国で初めて医療系三学部を同一キャンパスに擁する大学となりました。

現在、総合移転整備計画は最終段階を迎えており、矢巾地区への附属病院移転と内丸メディカルセンター整備事業の完遂を目指し、全学を挙げて取り組んでいます。

附属PET・リニアック先端医療センター

放射線治療装置（リニアック）

附属花巻温泉病院

温泉を利用した温水プール

循環器医療センター

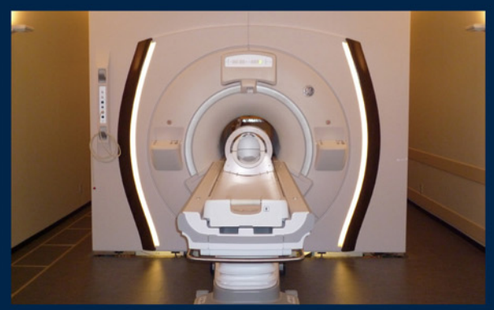
次世代型320列CT（世界第一号機）

矢巾キャンパス

全ての教室や実習室、研究室は学部単位に設けておらず、仕切り壁もなく、フレキシビリティに富んだ造りとしてあり、生命科学の進歩発展や時代の要請に応じた自在なレイアウトの変更を可能としています。

医学部・歯学部・薬学部の医療系三学部が一つのキャンパスに揃ったことで、学部間の連携が一層強固となり、垣根を越えた教育・研究が進んでいます。

ドクターヘリ基地・ヘリポート（（平成25年5月より本格運航）



国内導入2例目となる超高磁場7テスラMRI装置
（平成22年度整備）

東日本大震災津波からの医療復興を目指して

平成23年3月11日に発生した東日本大震災津波は、岩手県に甚大な被害をもたらし、多くの尊い生命と財産が失われました。

本学は、小川彰学長の陣頭指揮の下、発災直後から被災地において最大限の医療支援を行うとともに、全県の災害医療をコントロールし、避難所診療の効率化と被災した災害拠点病院の支援にあたりました。

本学は、今後も医療支援を長期的に継続するとともに、一日も早い岩手県の医療の復興・安定に資するよう全学を挙げて取り組んでまいります。

災害復興事業本部 ～長期的な支援活動の展開～

大災害の発生以来、本学が担ってきた様々な復興事業を有機的に連携させ、より実効性の高い組織的な支援活動等を行うため、学内に災害復興事業本部を設置し、さらに災害医学講座を立ち上げ「究極の総合医療」である災害医療を担う人材育成に努めています。

大災害を通じて得られた教訓を学問的に体系立て、将来起こり得る大災害に備え、新しい災害医療モデルの確立を目指しています。

災害時地域医療支援教育センター
（平成25年3月、矢巾キャンパスに竣工）

①いわてこどもケアセンター
②岩手県こころのケアセンターによる仮設住宅訪問
③いわて東北メディカル・メガバンク機構による地域住民健康調査

東日本大震災津波発生直後における医療支援活動等

沿岸部被災地の視察を行う小川学長

沿岸部被災地診療所を視察する小林附属病院長（当時）

学生有志作成 防災ガイドブック

東日本大震災津波の発生を受けて、医・歯・薬学部の学生有志が三学部の知識を結集させ、本学教員による指導・監修の下、自主的に作成しました。

WHO主催「医療復興国際会議」

平成25年3月5日～6日、本学矢巾キャンパスで開催され、西太平洋地域17カ国の保健医療行政に従事している各国政府高官などが参加。

災害からの医療復興に対する意識を共有し、本学の主張を基にしたステートメントを全世界へ発信しました。

議長を務めた小川理事長